

平成28年度修士論文・卒業論文概要

木村， 栞太
九州大学大学院人間環境学府

古閑， 千晶
九州大学教育学部

吉川， 健太
九州大学教育学部

西村， 直人
九州大学教育学部

<https://hdl.handle.net/2324/1932055>

出版情報：教育経営学研究紀要. 20, pp.131-142, 2018-03-29. The Laboratory of Educational Administration, Educational Law Graduate School of Kyushu University

バージョン：

権利関係：



「学生サポーター制度」の実践についての一考察

西村 直人
(平成 29 年 3 月卒業)

【章構成】

- 序章 本論文の目的と方法
 - 第 1 節 本論文の目的
 - 第 2 節 本論文の方法と構成
- 第 1 章 学生ボランティアの背景と変遷
 - 第 1 節 学生ボランティア
 - 第 2 節 学生サポーター制度
 - 第 3 節 学生ボランティアの多様化と学生サポーター制度
- 第 2 章 学生サポーター制度の成果と課題
 - 第 1 節 学生サポーター制度の成果
 - 第 2 節 学生サポーター制度の課題
 - 第 3 節 考察
- 第 3 章 学生サポーター制度の実践
 - 第 1 節 現場視点での再検討
 - 第 2 節 類似他制度との比較
 - 第 3 節 総論
- 終章 本研究の成果と課題
 - 第 1 節 本研究の成果
 - 第 2 節 本研究の課題

【概要】

序章 本論文の目的と方法

学校教育の現場を取り巻く状況は常に変化しているが、その一つに地域住民や学生を人材として教育現場で活用する学校ボランティアが挙げられる。教育的機会の拡大につながるという点で大学でも好意的に捉えられ、最近では活動を単位化する動きも見られ、ボランティアの属性や動機、活動内容や運用体制の多様化が進んでいる。

制度自体の歴史が浅く、先行研究は実践例や実践に基づく調査報告が中心で、制度の広がりや内容・課題などの包括的な検討は未だ少ないが、「指導が行きわたるようになった」「在学中に現場に触れ勉強になった」など意図したとおりの相乗効果が認められている。一方で「教員と学生の連携不足による混乱」「指示系統や活動内容が不明瞭」などの問題が繰り返し挙げられており、現場での認識とのずれや浮上した課題に対して有効な解決策がとれていない状況があることも指摘されている。

制度が多様で柔軟な活用ができるが、故に不明瞭な部分も多く混乱を招くという両面性を持っていると筆者は考える。

本論文では学生ボランティアの多様化について整理したうえで、福岡市「学生サポーター制度」を取り上げ、受け入れの当事者である学級担任や学生の現場経験に基づいた記述も調査対象に含め、現場に近い見解も積極的に検討した。

第 1 章 学生ボランティアの背景と変遷

阪神淡路大震災の頃から盛んになったボランティア活動だが、中教審・大学審議会の提言を受けた大学が、制度的に支える仕組みを整え、佐藤（2008）の時点で小学校の 7 割、中学校の 5 割弱で何らかの学校支援ボランティアが活用されるまでになった。

同時に「フレンドシップの活動を学生の自主性と大学の制度的指導の上に据えたため、どちらに重点を置くかによって、制度の運用体制や活動内容、参加する学生の属性や動機に多様性が生まれ、フレンドシップ事業で多かった触れ合いイベント型から、教員養成上のカリキュラムに組み入れる傾向が強くなるなど、概念の広がり」が見られると武田・村瀬（2009）は指摘している。

福岡市の学生サポーター制度は、九州大学の取り組みを礎に、2004 年度より市教委と 9 大学 1 短期大学で開始、現在までに 18 校が協定を締結。

学校・教育委員会・大学の三者による学生ボランティアの基本モデルである一方で、各学内での扱いは、「ボランティアの一環」から「社会経験による学生の成長」「教育学的学び」「インターンの価値」まで幅があり、運用状況も異なっている。これは現場に派遣される学生のモチベーション、希望する活動内容に大きなばらつきがある可能性を示唆しており、十分なコミュニケーションができていない中でニーズのミスマッチや混乱を招いていると推察できる。この様に学生サポーター制度は、多様化する学生ボランティア制度の縮図を映しており、興味深い事例である。

第 2 章 学生サポーター制度の成果と課題

「三者三両得」は学生サポーター制度の謳い文句だが、ボランティア活動の第一はあくまでも受給者のニーズであり、供給者は結果的に利を得る、両得の関係にある。しかし、先行研究では学校・園に焦点を当てた論考は殆ど出ていない。本論文では受給者に留意しつつ諸課題を検討した。

報告書などを分析すると、一定以上の成果が上がっている反面、ハード面では学生の活動時間の確保と交通費などの問題と、これが受入れ校の固定化にも影響している可能性が指摘され、受入れ校・内容の多様化や交通費の支給が要求されており、ソフト面では、受け入れ態勢の不十分さ・活動内容の不明瞭さによる戸惑いやフラストレーションが挙げられ、コミュニケーションの活発化が課題として繰り返し指摘されていた。

連携不足による手持無沙汰の解消などの必要最低限のコミュニケーションに加え、供給者である学生の学びを深化する 教員とのコミュニケーション、制度さらに発展させていく関係者全体レベルでの意思疎通とが機能していく必要があるが、意思疎通の充実が求められているにも関わらず機能していない原因の検討と次善の策の模索とが本論の課題と確認した。

第3章 学生サポーター制度の実践

第3章では、第2章までの検討を経て得られた考察をM小学校教員と学生への質問紙調査と聞き取り調査を中心とした学校現場の視点から、両者の認識の違いに着目して再検討し、現実的次善策を探索する実験的手法として、制度の運用体制などで共通項を持つ他の制度の事例を牽き考察を試みた。

結果見出されたのは、活動内容の不明瞭さという課題意識では一致しながら、学級担任は意思疎通の構築を重要な課題と捉えていないという意外な結果であった。

さらに、現場の教員が学生サポーターに最も期待されている役割は「ナナメの関係での子どもの関わり」などではなく「誰でもこなせる作業の処理」であるという見解が示されるに至った。

「役に立ちたい」学生サポーターに対し、期待されていたのは敬遠されがちな事務作業であり、学生の互酬性が揺らぐかに思われたが、同時に提示された事務作業に見出し得る教育的意義によって、これらが両立することが改めて確認できた。意思疎通の構築と制度のさらなる発展は、学生の意思表示に委ねられていることが示されたことから、期せずして学生のボランティア性が重要な要因となることも明らかになった。

終章 本論文の成果と課題

本研究では、序章ならびに第一章を通して、日本における学生学校支援ボランティアの興隆とその変遷を整理し、多様化する学生ボランティアの中での福岡市「学生サポーター制度」の位置づけについて明らかにした。

第2章で先行研究と既出のデータを用いて、学生サポーター制度の成果と課題について検討したのち、第3章において学校現場での調査によって得られた情報に照らし、現場視点からの再検討を行った結果、前章の検討では明らかにできなかった問題の背景に迫る示唆を得ることができた。

また、今回実験的に行った類似他制度との比較という検討手法を通じて、学生サポーター制度のみの分析では得られなかったであろう考察を得ることができ、章末での命題に対する次善策の提示をもって本論とした。

現場視点の分析によって考察が深まる事が示されたことで、何らかの制度を論じるうえでその当時者を対象とした調査などを考察に加えることの重要性、ならびに第3章の類似他制度の分析を通じて、当該分析が研究手法として有意義になりうる可能性が示唆された点についても、本研究の収穫としたい。

本研究の課題としては、本研究分野においては比較的網羅的に検討を試みたものであるが、その反面、個々の検討要素については、総じて薄く不完全な部分が多い点。また、第三章の検討で研究としての可能性が感じられた分、検討材料の少なさ・不完全さという点で大いに課題を残した。より充実した資料と手法をもってさらなる検討を行うことを今後の課題としたい。

【主要参考文献】

- ・ 武田明典・村瀬公胤「日本における大学生スクールボランティアの動向と課題」神田外語大学『神田外語大学紀要』21、2009
- ・ 姫野完治「学校ボランティアの活動形態による教職志望学生の学習効果」日本教育方法学会『教育方法学研究』32、2006
- ・ 佐藤晴雄「学校支援ボランティア活動の効果と今後のゆくえ」相模原市総合学習センター『さがみはら教育』144、2008
- ・ 坪井裕子「小中学校における学生サポーター活用について」人間環境大学『こころとことば』8、2009